

風 韻

第
22
号

(昭和五十七年度)

神
戸
大
学
風
韻
会

風 韻 第 2 2 号 目 次

◎ 六十年の思い出(その四)……………師 匠	宇治 正夫…… 3
◎ 半 世 紀……………会 長	荒川 祐吉…… 4
◎ 先輩登場	
◦ 謡って五十年……………旧 1	藤井 茂…… 6
◦ 風韻OB会に出席して……………新 5	林 哲夫…… 7
◦ 風韻会入会にあたり……………特別会員	井川 一宏…… 8
◎ 学生投稿	
◦ 能とクラブと私…………… P 3 3	桑名 浩之……10
◦ クラブと私…………… B 3 3	梅戸由香里……11
◦ クラブとは…………… E 3 2	谷口 敏文……11
◦ 初 心…………… B 3 2	小山 徳子……13
◦ 懐古録—舞囃子「松虫」を終えて—… E 3 1	野田 功……14
◎ 決算報告書……………	15
◎ あしあと(昭和56年度活動報告)…………… E 3 1	井関 浩一……16
◎ 新役員紹介……………	18
◎ 幹事長になってしまって…………… L 3 2	藤井 和之……19
◎ 昭和57年度行事予定……………	19
◎ OB通信……………	20
◎ 思えば……………	
— 卒業生より —……………	21
◎ 第三回風韻会OB会報告……………	22
◎ 伝 言 板……………	22
◎ 風韻会名簿……………	23
◎ 編集後記……………	24



野宮……宇治正夫

於大槻能樂堂



夏 合 宿



O B 会

六十年の思い出（その四）

師匠 宇治正夫

風韻会が誕生してから今年で六十五年になる。出発の当時を思い返して、遠い昔のようにも思われ、またついでこの間のようにも感じられる。それにしても半世紀を遙かに越える長い年月であり、この間、能楽一筋に打ちこむことができたことはこの上もない仕合わせと感謝している。この感謝の気持ちも含めて、社中の風韻会六十五周年記念大会を企画し、その第一回大会を去る三月二十八日湊川能楽殿で催したが、社中の皆様も記念大会の意義を悟って熱演し、多数の来聴者があって盛会であった。今年の秋から来年一月にかけて、第二、第三の記念大会を志している。

わたくしが神戸大学の稽古に向くようになってから五十年が経過した。その間に教えた学生は三百人を越えるが、卒業後も謡を続けている人も多く、わたくしの社中になっている人も少なくない。風韻会に次ぎ次ぎと若い方が加わることはわたくしの喜びであり誇りでもある。

若い学生さん達が日本の伝統的芸術に精進されることは心強いことであり、わたくしは正しい謡を伝えるように努めてきた。学生さん達は素直にわたくしのいうことを聞いて、三年か四年の短期間に長足の上達を示すのが常であった。とくに腹に力を入れ反復練習を重ねる成果は著しく、礼儀作法を重んじ、社会人としての基本的素養を身につけられるのを見るのはわたくしにとっては無上の喜びである。しかし、学生さん達には若いが多いため多くの足りない節もある。わたくしはこれらの足りない点を遠慮なく指摘することによって、次の時代を背負う立派な人になってもらうように努めたいと思っている。

半世紀

会長 荒川 祐吉

半世紀といえ五十年です。「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり。」という文言がありますが、この夢まぼろしの五十年を、長く迂余曲折の多い日々と感じるか、羊の歩み際の駒とみるかは、人それぞれが迎えるその人生経験によって多様でしょう。

わが神戸大学風韻会も、今年で、創立以来正に半世紀を経ることになります。この半世紀の歴史、果して長かったのか短かったのか。それは皆様の、風韻会へのかかわり方によって、いろいろ異なっており感じられることでしょう。

しかし、私の感懐からいえば、やはり半世紀は長いノ実に長い年月だと感ぜられるのです。前会長藤井茂先生は、若くして神戸商業大学助手になられてから御定年退官まで、丁度四十年を母校の教官として勤められました。又私自身についても、昭和二十二年に教官になって以来、来る六十二年春の定年まで勤めたとして四十年です。新制大学になって、大学院博士後期課程にならないと教官として採用され得なくなっていますから、今後、この四十年勤続の記録を破ることは制度的に出来なくなっています。

このことに鑑みるならば、わが神戸大学風韻会が、宇治正夫先生

というお一方の御指導の下に、五十年を闊したということが、そのことだけでも、如何に稀で、奇蹟的な事実であるかが実感できると思われます。

しかもこの五十年間は、しばしば云われるように、正に「激動の昭和史」の真只中での五十年です。今少し歴史年表と神戸大学の歴史、そして「風韻」十七号に掲載されている会の歴史を顧みて、この五十年の歩みを辿ってみましょう。

昭和七年から五十七年までに、内閣は犬養内閣から鈴木内閣まで何と四十五回替っています。昭和七年は、五・一五事件、右翼テロ、そして満洲国建国と、戦前の暗い日本の足どりが本格的にはじまろうとしていた年です。神戸商業大学第一回学士試験合格証書授与式は、この年の三月に行なわれ、昭和九年には、現在の六甲台学舎が完成して移転式が七月に挙行されています。この頃、関西学生能楽連盟の草分けである関西五大学連盟が盛に活動し、その発表会は戦況悪化で中止されるまで実に二十五回を数えます。また当時商業大学教官の間には、一種の謡曲ブームが起り、多数の教官方が宇治先生の御指導を受けられており、その中には、藤井先生、米花先生は勿論、古林、柚木、八木といった元学長先生方もいらしたと拝承しております。

昭和十六年（この年私は神戸商業大学予科に入学しました）太平洋戦争がはじまり、十七年六月五日のミッドウェー海戦で戦況逆転、その後日に日に形勢悪化、昭和十八年十二月には、遂にいわゆる「学徒出陣」となって、学生の姿はまばらとなり、残留者も工場、農村、炭坑などに勤労働員されるようになりました。この頃は、出

征者をはげまし送るための「出征謡会」が盛に行なわれたようであります。

昭和二十年八月、全国主要都市を焼土と化して太平洋戦争は終りました。二十一年に日本国憲法公布、二十二年教育基本法と学校教育法が公布され、六・三・三制がはじまりました。新制大学は昭和二十四年五月からはじまり、国立六十九校がこれに移行しました。

当初は、神戸経済大学、予科、経営学専門部、神戸工業専門学校、姫路高等学校、兵庫師範、兵庫青年師範が母体となり、法、経済、経営、文理、工、教育の各学部が作られたのです。昭和二十五年には「関西学生能楽連盟」ができ、新制学部完成の昭和二十八年の開学記念日には、記念祭参加謡会が行なわれています。

昭和三十年になると、学連の謡曲コンクールが開始され、第二回、第五回到三位入賞、昭和四十年には二位に入賞しています。卒業生歓送謡会は昭和三十四年からはじめ、舞囃子を毎年出すようになったのが三十六年からのようです。

昭和四十年からは秋季発表会をはじめ、四十二年創立三十五周年記念、四十七年四十周年記念謡会が催され、昭和五十二年は、恰も宇治風韻会六十周年と神大風韻会四十五周年が重なり、宇治先生の格別の肝入りによって「仰望会」が持たれ、袴十五着を整えていたこと、そしてその秋十一月十九日の記念謡会は格別の盛会であったことは、まだ記憶に新しいところです。

昭和五十四年九月には、待望久しかったOB会も発足し、先輩後輩の結付きは一段と深くなりました。そして、今年昭和五十七年は、見事に、半世紀の賀、五十周年を迎えることになりました。

こうみてくると、神戸大学風韻会は、宇治先生という偉大な「指導者」の抱擁のもとに、極めて順調に成長してきたように思えます。勿論、旧制時代と新生時代との違い、年代による価値観や感性の差、女性部員の多数の参加による新風の導入などにより、一方でダイナミックな変貌を日々経験しつつも、他方、先生の一貫した御指導と、さらには、半世紀の十六倍、八世紀にもなろうとする厳しい歴史の「選択」を生き抜いてきた「謡曲」そのものの「きづな」による一体感は、ますます強化されつつあるように思えます。

この半世紀、わが国は、戦争の炎を潜って、全く新しい国家に再生した。それは恐らく世界に数のない「革命」であったといってもよいでしょう。そして今や、世界に類のない平準化された所得配分を持ち、世界第二のGNPを持つ社会をつくりあげたのです。そして、この半世紀、わが風韻会は、吹き荒れる内外の激変に耐え、生き続けてきただけでなく、その内容を充実させ多様化してきたと思われまます。

本年創立五十周年を迎え、更に眼を次の半世紀に向け、新たな意気と展望を持って、次の第一歩を踏み出さねばならぬと痛感するものです。

先輩登場

謡って五十年

旧一回生 藤井 茂

「風韻」の創刊号（昭和三十六年度）に「謡って三十年」という題で思い出の数々を書き連ねた。

そこには、昭和七年四月から宇治正夫先生をお迎えして、神戸大学風韻会が生まれた発端から、戦時中学徒出陣で一時会が閉鎖されたが、戦後応召学生の復員とともに会が復活され、荒廃の中に朗々たる謡の声が蘇った経過などを誌しておいた。

神戸大学風韻会が発足してから今年で満五十年になる。その間に世は移り、戦争という激動の期間もあったし、大学制度も変わり、学生の考え方や生活様式に変化はあったが、神戸大学風韻会は連綿として続き、益々盛大になっている。まことに喜ばしい限りである。それについては、歴代の学生会員諸氏、わけでも幹事諸氏の熱意と献身があったことはいままでもないが、何にもまして宇治先生が終始一貫、精魂を尽して学生の指導に当たって下さったおかげであると感謝の念にみたまされている。

三

わたくしが宇治先生に師事してから五十年になる。わたくしは学生時代に二年間、風韻会の前身である鞍馬会に属していたが、ほとんどスリーピングメンバーであった。昭和七年、大学卒業と同時に母校に助手として職を奉じたが、あたかもその時に神戸大学風韻会が発足した。わたくしは学生の稽古が済んだ後で、宇治先生に乞うて個人指導をして頂いた。これがわたくしの本格的な謡の稽古の始まりで、したがって、わたくしの謡歴はわたくしの研究歴とそのスタートを同じくするわけである。

当時、宇治先生は少壮気鋭の能楽師として令名が高く、その芸術に打ち込まれる御精神と、そこから湧き出る格調高い芸風と人格とは初心者のわたくしの胸をうつものがあり、わたくしはぐんぐんと謡に惹きつけられていった。謡という芸術に全心全霊を打ちこまれる先生の御精進は、真理を求めて苦悩する学問者の歩みに通じるものがあり、わたくしは宇治先生から謡についてはもとより、学問者にとっても有益な多くのものを教えられた。

わたくしと同時に、またはわたくしより後に多数の神戸大学教官が宇治先生の門に入られたが、一樣に先生の謡とお人柄に傾倒されたようである。「芸術の道を歩むのも、学問の道を進むのも、道こそ異なれ、心は同じだなあ」と洩らされた先輩教授もあった。

三

宇治先生の芸風と人格に魅せられて、わたくしはひたすらに先生の御指導に従ってきた。戦争中、社中で稽古を続ける人が数人になつた時も、わたくしは謡い続けた。心身練磨は戦時中なるが故に一

層必要であるという先生の御信念に共鳴してのことであつた。

わたくしは謡を人間修業の道と心得て稽古にはげんできた。もとより、わたくしは学問に生きるものであり、学問精神を通じてわたくしの人間を磨かねばならない。しかし、学問はあくまで理性の世界であり感性に欠ける。これを補うものとして謡をもつことによつて全的な人間修業が果たされると考えたからである。したがつて、わたくしは謡については一切理屈は言わず、ひたすら謡うことのみを努めようとした。宇治先生は腹に力を入れて無念無想の境地で謡えと訓される。まさしく、わたくしの希望するところである。悲しいことには、今になつても腹の力が抜け、雑念が入りこんでくる。先生からきびしく直されるのがこの点であり、修練の不足と恥じ入るばかりである。

学問の世界も芸術の世界も理想は高く道は遠い。わたくしは本年三月で満五十年の教壇生活の幕を閉じる。しかし、学問研究に終点はない。生のある限り学問を続ける所存である。謡についても同様で、これからも謡い続けるつもりである。人間修業は一生の課題であるからである。

五十年の歲月の中には、時として謡について怠りが生じた。長期にわたる海外出張の場合はやむをえなかつたとしても、学生部長や経済学部長などを兼任して雑事に追われ、心にもなく謡から遠ざかることもあつた。しかし、そんな時でも学生の謡会や社中の謡会にはつとめて出場し、先生も会の前にはきびしい稽古をつけて下さつた。最近数年間は毎週稽古に出て、先生からきびしく直して頂くのを楽しみにしている。

このようにして、五十年間、謡い続けることができたのは、宇治先生の熱心な御指導のおかげであり、感謝の極みである。宇治先生の社中の風韻会が生まれてから今年は六十五年になる。風韻会六十五周年記念の会も計画されている。一人の先生が六十五年の長年月にわたつて社中を育てられてきたことは驚嘆すべきことであり、その中で五十年の薫陶を辱うしたことは、わたくしにとって無上の仕合わせと思つている。

この記念すべき年に當つて一層謡に精進したいものと決意を新たにす次第である。(昭和五十七年一月二十八日)

風韻OB会に出席して

新五回生 林 哲 夫

私が風韻会に入ったのは他の人達より遅く、大学三年の十一月に学生集会所で開かれた秋季発表会を聴きに行つて、ゼミの藤井先生に勧められたのがきっかけであり、学生時代はせいぜい一年位の練習しか出来ませんでした。

幸い地元の日本毛織に入社してから同社の謡曲同好会に入り、若い女性会員などと一緒に練習する機会を得たことから、一時は仕舞も始めるなどかなり熱心にやりましたが、四年程して仕事が変わり、残業や出張がやたらに多くなると謡からも自然に遠ざかつてしまい、最近ほとんど御無沙汰の状況です。

そんな不熱心な会員の私が、風韻OB会なるものが出来たから出

席せよとの通知を頂き、謡をやらなくてもよいからとにかく集まろうとの趣旨に釣られて、ついついどうかと出席したのが第二回のOB会（昭和五十五年八月十九日、於・スカイサントリー）でした。幹事役の牧・里井両先輩に目ざとく見つけられ、来年は君と堤君（新六回生・塩野義製菓）に頼むよと引導を渡されてしまいました。ずぼらな私と正反対で、謡の勉強にも風韻会への出席にも真面目で熱心な堤君がついているから大丈夫だという計算だったようです。

さて、OB会を開くとすれば、日時・場所の設定から先生方のご都合の確認など、いろいろ問題が出てまいります。七月の吉日を選び、堤君のお膳立てで主要メンバーが集う作戦会議を開きました。集まった面々は、荒川先生、牧・里井両先輩（新四回生）、段野君（新十三回生）、現役の幹事長・藤裏君、それに堤・林といったところでした。日時はやはりお盆明けの日曜日がよかろう、場所は杉本先輩（新三回生）のお世話になったスカイサントリーがなかなかよかったです。会費はもう少し安くならないか、それに今度は女性会員にもぜひ来てもらうようにしよう、等々の作戦を決め、案内状の作成にかかりましたが、さて何人集まるか心配でした。

当日は藤井先生は所用でご欠席でしたが、米花・荒川両先生のご出席を頂き、OB十二名、現役二名が集まって楽しい時間を過ごすことが出来ました。杉本先輩のご配慮で特別室にごちそうが並び、飲むほどに酔うほどに、昔話はずみずみ。紅一点の長永さん（新二十五回生）も出席され、各位の近況報告を聞いていると、高野山の合宿で練習したなどが思い出されます。いつしか時間が過ぎて六時半の閉会となり、ほっとした次第です。これからも毎年夏に

OB会を開催する予定ですので、万障くり合わせ、ご出席下さるようお願いいたします。今回も新三回生の江谷先輩（第一勸銀）から、新二十七回生の伏見君（トヨタ自販）まで巾広いご出席があり、新六回生の西野幹事長（丸紅）などは東京からわざわざ来てくれる等、思いがけず懐しい顔ぶれに会えました。平素はアクセクと仕事のことばかり考えているので、久しぶりにくつろいだ気分になりましたが、これも謡の功德と言えるかもしれません。

なお、この席上をかりて、当日ご出席頂いた両先生をはじめ、OBの諸兄姉、現役の藤裏・野田両幹事及び当日葉書等で近況をお知らせ頂いたOBの皆様方に厚くお礼申し上げます。

風韻会・入会にあたり

特別会員 井川 一宏

新入会員ですので、どうかよろしくお願い申し上げます。昭和四十六年から神戸大学に勤務しており、四年前の正月から湊川神社西の練習場で、声を出しております。宇治先生の御指導は、人格形成人生論の面にも及ぶ深いもので、教職の身としましても、非常に深い感銘を受けております。

謡曲の方は、「結構でした」から「何回も練習して下さい」に、先生の批評が変ってきておりますが、自分では、全く五里霧中の感にありません。何回も繰返し練習して、自然に会得してゆくことは、幼児教育からの基本であります。本などの活字から理屈を学ぶ方

向に傾いてしまった自分の頭を、その基本にもどすことが困難になりつつあるようです。

手足といった体を使って学習することは、幼児の能の発達を促進するということから、頭で理解する以前に、体でつかむことの重要性が認識されてきております。勿論、学習の内容にもよるのですが、経験的に言えることは、頭で理解しただけではすぐに役立たず、実際に有用であるためには、体でおぼえている状態になければならないということでしょう。

社会科学の研究（私の場合、経済学）を続けておりますと、理論と現実認識の違い、あるいは統計の計算値（例えば、消費者物価指数）とその実感との違いを強く感じる場合があります。このような場合には、新しい考えが生まれるか、理論的理解が深められることとなります。しばしばそうなのですが、現実認識とか実感というのが正しくて、理論とか統計値の算出方向に不備な点があり修正されねばなりません。この場合には、自分の体で理解したものを主体に、頭で理解していたものを変更してゆくことになり、創造の喜びと同時に、苦しみもあとに続いております。逆に、現実認識とか実感の方が修正されてゆくこともあります。その場合、頭での理解が不十分であったことにその原因があることが多く、結局は、理解の程度が深まることで、それらが一致することになります。いづれにせよ、体で感じることは無視できない大切なものであることがわかります。

体で理解するための訓練に耐えて、なんとか実感として謡曲を理解したいものと考えております。ともすれば多忙にかこつけて、な

お 食 事 処

鉄 板 焼
おこのみ焼
定 食

ひ ろ

御 影 大 手 筋
TEL 811-2844

人の出逢いと心のふれあいを創る店

- サントリーアームズ
シーホーク

PUB SEA HAWK

- レストラン
キャプテンコック

CAPTAIN COOK

グループで楽しめる盛合せ料理
〈ご宴会パーティー〉

船の **スカイサントリー**

神戸三宮交通センタービル(9F) TEL 391-3705



まげ心に負けてしまう気持ちを、「とにかく続けなさい」と引締め
て下さいます藤井、米花、荒川の諸先生に感謝致しますとともに、
諸先輩と現役の皆様にも、今後の御高配をお願い申し上げます。

学生投稿

能とクラブと私

P 33 桑 名 浩 之

よく友達に何のクラブに入っているかと尋ねられる。答えるとは何故入ったかと聞かれる。頭に二つばかり理由がうかぶ。一つは古典芸能にじかにふれるため、一つは集団生活の必要を感じたため。もっともこれらは今頭にうかぶものであって、実際は何の気なしに入ったのである。しかし、今でも入ったその日の出来事が頭にうかぶぐらい、クラブの印象は強かったのである。しかし、入部した当時は、先輩の名前を憶えるのに頭を使うだけで、能がどういうものであるのか、謡や仕舞がどういう役割を果たすのか、ということにも全然関心がわかなかつた。こういう事に本格的に関心をむけはじめたのは夏合宿前からである。その前にジュニア合宿があつたが、その時は無我夢中であつたから、あつというまに過ぎてしまった、という感じだが、夏合宿は今年の行事の中で一番心に残っているものである。各先輩の謡、仕舞に対する熱心さを目のあたりにして、能をやる上で一番大事なものが何であるか、ということが少しわかつたような気がする。また、新しい曲を習うにつれて、ふしまわしも少しずつわかつて、謡のおもしろさもここにあるだろうと思つた。しばらくすると春合宿がある。楽しみと不安が入り乱れている。しかし、夏の教訓を生かして、一生懸命やろうと思う。

さて、現在、一年生は六人。男女三人ずつ。八ヶ月ばかりの付き合いだが、個性持ちがそろつていておもしろい。各自の個性は、とりわけ、コンパの席で最大限に発揮される。酒が入ると人皆本性をさらけ出すというが、まさしくその通りであることを何度か実感した。自分も酒を飲んだことがなかったが、おかげさまで、酒の味が少しわかつたような気がします。しかし、何といつても、お酒に関しては男弱女強という現実が横たわっているため、男子諸君は女子の陰で飲んでいる始末です。もっとも、最近男子もかなり場数を踏んでいるので慣れてきたとみえて、そう簡単に酔っぱらわなくなつた。

この六人が、来年から二年として活躍しなくてはならないのだ。夏合宿の時、半ば強制的に、半ばあきらめという状況の下で、役員が決つた。ジュニアチーフ・桑名、会計・寺田、文総・梅戸、学連役員・武内、同委員・船寺、写真係・木下、である。自分の役がうまくつとめられるか不安であるが、決定した以上、できるだけ事をしようと思う。

さて、最後に付録として、一年生六人の愛称とその由来を述べておこう。女子の姓は趣があるため、愛称は姓からとられている。つまり、寺さん、梅さん、船さん、という具合である。これに対し、男子の愛称は性格に由来する点が多い。つまり、きつちゃん、ひょうきん、そして私の門外（後の人がこれを見てどう思うだろうか）である。もっとも、男子の愛称は流動的なので、もう少しましなものになることを期待して、以上長々とした空疎な話を終わります。

（昭和五十六年十二月十三日十一時九分十五秒）

“クラブと私”

B 33 梅戸 由香里

正直なところ、この原稿を書くにあたって、非常に困っているのです。書くほどの人間的興味も持っていませんし、その上、文才もありませんから。それに、自分が書くこと決まったのは、公平で且つ原始的な「ジャンケン」に負けたからなのです。よりによって、最も非文学的であるこの自分に、命令が下されてしまったのです。自分にとっては、不運としか言いようのない出来事です。只今、題材を求めて、悪戦苦闘中です。出来れば、今、これを読んでいらっしゃる皆さんに、手伝っていただきたいというのが、今の切実なる思いです。

え？ クラブについてですか？ これは、なかなか困難な課題ですよ。と言うのは、左右を向いても、上下を見ても、はた又、逆立ちをしても、未知の事ばかりで、単細胞の自分は、理解に苦しみ、頭の中は渋滞中です。そればかりでなく、この自分が、なぜ、この部に居るのか。これは、今だに解けない、そして、恐るべき謎なのです。と言っても、前提があるにはあるのですが。……実は、この部に、「一目ぼれ」をしてしまったのです。そのアットホーム的な暖かさに触れて、恋におちいってしまい、部の活動をすっかり忘れ、居心地の良さに、そのままずっと居座って、現在に至っていません。「恋は盲目」とは、まさしくこのこと。その恋の相手は手ごわくて、苦戦の毎日です。扇を片手に、開いたり乗り込んだり、はた

又、大声でラブコールをして、振り向いてもらおうとしているのですが、見向きもしてくれず、相手のほんの一突きで、転がってしまう次第です。「一目ぼれ」をしてしまったばかりに。皆さん、「一目ぼれ」には、くれぐれも注意しましょう。

先輩の方々についてですか？ 皆さん、すてきな先輩ばかりで（ゴリゴリ）、大変優しいお兄様・お姉様です（ゴリゴリ）。嘘は申しません（ゴリゴリ）。それにしても、料理をするのも疲れるのです（ゴリゴリ）。

自分についてですか？ 実は、非常に、真面目でおとなしい人間なんです。嘘は申しません。根っからの真面目人間です。見ていただければ、よく分かると思いますか？……？

舞台上立つ前の緊張と、終わった後の安堵。その間にあるのは、空白の時間です。残念ながら、今の自分には、その時間は、何も顧みることができない。「空白」の時間です。いつか、その時間を顧み、何かを見つけることができるでしょうか。

最後まで、このたわいない文章を読んでもいただき、ありがとうございました。

クラブとは？

E 32 谷口敏文

クラブとは、どの様なものなのだろう。体育系のクラブの場合、その目標がはっきりしている。大部分が試合に勝つという目標に向

って一致団結する。(体育系のクラブが「勝つ」ということのためにだけ存在しているというのはいきなりすぎかもしれないが。)これに対し、文化系クラブに属する「風韻会」はどうなのであろう。活動内容は、「謡い」と「仕舞」である。これを見る限り、「風韻会」は「能」を媒介として成り立つクラブである。ただ一口に「能」といってもその接し方は、各個人によって異なっている。なかには私のように、「能」にある程度の興味はあるにしても、さして研究しようとも、理解しようとも思っていない人間が存在しているのである。だからクラブ全体で何か一つの目標に向けて、(このクラブでは多分それは「能」であると思われるが)一致団結していこうとする、はなはだ窮屈であろうし、まとめて行こうとする執行学年が、相当はつきりした信念をもっていなければなるまい。いやそうであっても大変むづかしい事の様に思える。となると「人と人の付合い」が必要以上に重要になってくるようだ。「風韻会」というクラブは、人数が少ないせい、また内容的に一般向けしないせい、クラブ内での「付合い」がさかんであり、それがクラブを支える大きな柱となっている様だ。しかしこの「付合い」というのが難かしいのである。(人によっては、楽な人もいるようだが。)各人それぞれ自分なりの考え方を持っているのだから、よほど気の合った者ばかりが集まらないかぎり、そんなにすぐにはうまくまとまらない。それぞれどこか、ちょっとこじれたりするともろくもくずれさってしまいそうな気がする。特に幹事学年ともなると、その学年としてクラブを引っばって行かなければならないわけだから、少なくともその学年の中では、お互いに理解し合っていないければならないのではない

か。その為には、全くしょうもないようなことでも、皆で一つのものについて一緒に悩み考える必要があるように思える。そうした中からお互いの理解が生まれてくる。これはそんなにすぐできるようなものではないとは思うけれど。とにかく現在のようになんがクラブに対して求めている事が一様でない場合には、特に大切なことではないだろうか。

人間関係ということは別にして、前に書いた様にクラブとしての「風韻会」が要求するものは、はっきりしていない。(少なくとも私の目にはそう見える。)しかし、これは他の大学の能楽部と称する多くのクラブでも言えるのではないだろうか。だから、学連が何をしようといま一つはつきりした反応が表われない。大学のクラブの方に、学連に対して要求しようとするものがはっきりしていない限り、学連が何をしようと同じである。ひょっとするとこれと同じ事が「風韻会」の中でも言えるのかもしれない。各個人が、自分で何をしたいのかはつきり理解していないのではないか。もしこれが本当だとすると、はなはだやっかいである。もつと真面目に考えねば。なにやら、自分でもわけのわからぬ事を書いているうちに、

写真撮影スタジオ

証明書写真
出張証明写真

櫻井写真館

阪神御影駅北100m TEL (078)851-2739

「風韻会」がものすごく恐しくなってきた。私自身まだ全然「風韻会」のことがわかっていないのである。しかし、こわがっていても仕方がないので、自分なりにあと二年数ヶ月を過してみよう。他人を殺さず、そして自分も殺すことのないように。

初心

B 32 小山 徳子

年月のたつのは早いもので、このあいだ入部したと思ったら、もう幹事学年を迎えることになってしまい、一種の驚きというか、とまどいを感じています。今はちょうど、クラブにとっても私にとっても、節目の時期に当たっており、クラブとは何であったか、また何であるべきかと考え直してみることがあると思います。

芸事においては、技術が第一とされています。確かに、技術は一つのきびしい現実であり、なくてはならぬ手段であると思います。大学の四年間、クラブにおいて何をめぎすのかという問題を考えるとき、最初に浮ぶのは技術の修得でした。しかし、四年間で一体どれほどのものが身につくというのでしょうか。私は能楽師になるわけではない、一介の学生にすぎません。学生には学生の分があつて、技術自体を目的とするのは思い上りにすぎないかもしれませぬ。ですから、基本の型をしっかり身につけ、基本に帰るといふ、骨組としての技術を目指すことを、これからの目標にしていききたいと思ひます。

技術ということの他に、これを内包するものとして「心」があります。これはつかみどころのない言葉ですが、技術を手段とみるならば、理想であり目的であるといえます。骨組みとしての技術を生かすためには、「心」がどうしても必要だと思ひますし、大学生活におけるクラブの役割りについてみると、この「心」こそ重要ではないかと思ひます。

それでは、能の心とは一体何でしょうか。私には全くわからないのですが、しかし、能の心というとき、心に浮んでくるのは、能の舞台の有様です。ほとんど動きのない、静かな舞台。低い地謡の声。その静けさには、しかし強さが有り、その強さは、抑えられた強さ、凝縮された力といえるものです。その空間を突然引き裂く笛の音、一瞬の魂の緊張。動きの間と間、拍子と拍子の間の緊迫。それは充実した無の空間といえます。この緊張した時を充実して過ぐすということ、この中で充実して生きるという姿勢が、私には本質的なことのように感じられました。この姿勢が、能の心に通じているとすれば、そこから生れてくるのは、忍耐力、努力、ひたむきな心、謙虚さ、といったものではないかと思ひます。礼儀ということも、もともと型としての作法から起つたのではなくて、こういった気持ちから自然に生れてきたものでしょうし、その本来の心を忘れないでいることは大切だと思ひます。

以上、私自身の持っている理想を書きましたが、これは現実とそぐわない夢にすぎないかもしれませぬ。しかし、これは、風韻会が今まで持っていた、またこれからも持ち続けてもよい夢の一つではないかと思ひます。幹事学年として、私の初心を書かせていた

できました。

懐古録―舞囃子「松虫」を終えて―

E 31 野田 功

秋季発表会で、舞囃子「松虫」をさせて頂いてから、まだ一ヶ月もたっていないのに、自分にはずいぶん前のことのように思える。けれども発表会当日のことはもちろん、そこに至るまでの練習の過程については、はっきりと私と脳裡に焼きついている。というよりも、そのことについてしか頭に残っていないと言った方がよいかも知れない。

私が舞囃子をする正式に決めたのは、九月の初めであった。宇治先生に、

「松虫の舞囃子をやりたいんですけど……。」

と、お願いすると、先生は、

「松虫ですか。あれは難しいから苦労しますよ。」

と、おっしゃった。その時は深く考えもせず「はい。」と返事したのであるが、実際には先生のお言葉の真意は全く理解していなかったのである。

こうして実に安易な気持ちで練習を始めた訳であるが、最初の四五回は、早舞を覚えるのに必死であった。笛の音にパターンがあるのはわかるのだが、耳慣れない私にとっては、どこもかしこも同じ様に聞こえ、どこで止まってどこで足をかけてどこで拍子を踏むの

かが、なかなか理解できなかった。果たしてこれで自演会までに完成するのだろうか？という不安が急に頭をもたげてきた。

それでも、四苦八苦して何とか舞を覚えた時は、「ああこれで山を越えた」と胸をなでおろしたのであるが、それも束の間、クセ、キリの練習に入るや否や、さきほどの山とは比較にならない程高い山が待ちかまえていたのである。それは一言で言えば、「動作が謡の文句に合わない、つまり、舞に心情が入っていない」ということに尽きるであろう。特にクセの仕舞がこれほど難しいものだとは思ってもみなかった。ある一つの動作、例えば菊の水を汲むところでもその位置とタイミング、さらには松虫の持つ気品の高さ等々を考えなければならぬ。それには心情を込めなければ、いくら練習してもできないのである。私も心情を込めることがよくわからなかったために、先生に同じ部分は何度注意されてもできなかった。松虫はむずかしいとおっしゃった先生のお言葉の意味が、ここで初めてわかったのである。

この越えられそうもない高い山とは反対に、私の心はかなり深く落ち込み、練習するのがいやになった時もあった。けれども時間は容赦なく流れ、秋季大会の日がやってきた。前日、先生が、

御集会、コンパ、宿泊にどうぞ

六甲パーラー

六甲団地西
TEL 861-6890

登録  商標

御菓子司
常盤堂

神戸市東灘区御影中町
 電話神戸(851) 4677番

お好み焼

各種定食

よし田

第一六甲センタービル2F
 阪急六甲山側 841-9588

「ここまでできたら細かいことを言っても仕方がない。元氣よくおやりなさい。」

と言った下だったのを、その時は複雑な気持ちで受けとめたのだが結局そう思うしかないと思い、当日は胸を張ってやることだけを考えた。

結果はどうであったかは自分には全くわからない。多分あまりうまくできていなかったと思う。でも、今では練習を通して、舞を謡の文句に合わせる重要性、舞台の位置どりが多少理解できただけでも充分だと思っている。そして二年半のクラブ生活の中で最も充実していた時間だったとも思っている。(こう思うのは、いつも過ぎ去ってからで残念だけど……。)

決算報告書

 自 昭和56年1月1日
 至 昭和56年12月31日

収 入	支 出
今期徴収部費	先生謝礼
252,445	174,000
大学援助金	歓送誼会
50,000	164,600
先輩寄付金	秋期発表会
246,500	144,501
風韻広告料	三商大発表会
44,000	23,800
発表会役料	三大学発表会
155,000	23,000
繰越金	学連費
338,461	28,000
	学連役員料
	22,000
	通信;交通費
	87,700
	風韻印刷代
	130,000
	文具費
	8,491
	写真代
	17,615
	雑支出
	1,723
	来期繰越金
	260,976
1,086,406	1,086,406

あしあと

昭和五十六年度

E 31 井 関 浩 一

二月・三月

二月二十七日(金)～三月五日(木) 春季合宿

於香川県小豆郡内海町 民宿「きらく荘」

練習曲 一年「養老」「嵐山」「籠」「東北」「殺生石」

「鞍馬天狗」「小鍛冶」。二年「高砂」「頼政」「井筒」「三井

寺」「鉄輪」「放下僧」「安達原」

去年の暖かさとうって変わった寒さで、何年ぶりかで雪の降る寒波であった。一同ふるえっぱなしであった。福岡先輩が参加して下さった。

七日(土) 慰労ハイク (須磨離宮公園)

十四日(土) 歓送謡会 於学生会館六階ホール

舞囃子「羽衣」(佐野)「船弁慶」(田中)「天鼓」(伏見正

先輩)他、仕舞三番、素謡十番、連吟二番、独吟一番

宇治先生、荒川、藤井、井川先生、栗岡、杉本、江谷、里井、

佐々木、段野、尾島、木村、富、伏見正、小島、山岸、遠藤、伏見和
岩崎、福岡、岡田先輩が御出席下さった。

四月

上旬～下旬 新入生勧誘月間

男子三人・女子三人の頼もしい新人が入部。部室に活気もど
ってきた。

二十六日(日) 新歓ハイク 於須磨浦公園

五月

二日(土)～五日(火) 旧三商大交歓会 市大主催

万博公園へのハイキング・発表会(於九阜会館)・コンパ、ソ
フトボール大会と今年は一橋大も復帰して、にぎやかな四日間だ
った。

十五日(金)～十七日(日) ジュニア合宿 於摩耶山王蔵院

練習曲「橋弁慶」「吉野天人」「大仏供養」「土蜘蛛」

伏見正、佐野先輩が参加して下さった。

六月

六日(土) 新歓コンパ 於国玉会館

例年の如く一年生は修羅場であったが、若いOBの方が多数参
加して下さり、たいへんにぎやかであった。

二十一日(日) 関西学生能楽連盟春季大会 於山本能楽堂

仕舞「合浦」「敦盛」「胡蝶」「東北」「鉄輪」「融」他、
連吟一番。

七月

五日(日) 三大学合同発表会 於上田能楽堂

素謡「橋弁慶」他、仕舞十五番、連吟一番
神大主催で行なわれた。神戸女子薬科大が抜けたため、四大の名称は三大に変わってしまったが、合同物の数も多く充実した舞台だった。

十一日(土) 謡納会 於部室

八月

五日(水)～十二日(水) 夏季合宿

於兵庫県養父郡関宮町 民宿「てるや」

練習曲 一年「竹生島」「菊慈童」「経正」「田村」「羽衣」
「小袖曾我」「富士太鼓」「狸々」「紅葉狩」。二年「賀茂」
「敦盛」「清経」「熊野」「善知鳥」「班女」「船弁慶」「鶴飼」。
田中千、反田先輩が参加して下さった。毎日涼しくしのぎやすい
日が続き充実した合宿であった。

二十三日(日) OB会懇親会 於スカイサントリー

荒川、米花先生、江谷、里井、林、西野、堤、福田、松岡、段

野、尾島、伏見正、長永、伏見和先輩が参加された。

十一月

七日(土) 神戸商科大学自演会賛助出演

連吟「経正」

十四日(土)・十五日(日) 六甲祭園遊会

今年は初の試みとして焼き鳥屋をやった。天候にも恵まれ、まずまずの二日間だった。

二十一日(土) 五十六年度秋季発表会 於学生会館六階ホール

舞囃子「難波」(井関)「松風」(浜田)「松虫」(野田)

素謡八番、仕舞二十番、連吟二番、独吟一番

宇治先生、荒川、藤井先生、栗岡、杉本、佐々木、戸次、志智、
伏見正、河上、伏見和、大西御夫妻、反田、古沢、田中邦先輩が
御出席下さった。

二十二日(日) 関西学生能楽連盟秋季大会 於上田能楽堂

仕舞六番、連吟二番

自演会疲れにもめげず、みんな頑張ってくれた。

十二月

十八日(土) 謡納会 於部室

その後クリスマスコンパ

新役員紹介

幹事長	藤井 和之	L	32
副幹事長	萩野 千夏	L	32
渉外	松元伊知郎	P	32
渉内	谷口 敏文	E	32
文総	松本 修治	A	15
会計	小山 徳子	B	32
学連役員	武内 博教	B	33
連盟委員	船寺佳奈子	A	16

喫茶と御食事

ニュー **浜**

神戸市東灘区御影本町4丁目8番17号
TEL 078(811)6944

文具・事務用品・コピー

文具のスズヤ六甲店

国鉄六甲道メイン六甲ビル2階
TEL (078) 821-6606

今夜はあなたも

Let's Fever

ごあんない

♪パブお一人さま

女性 1300円
男性 1400円
他 10% 飲食税要
G&G ボトル 3200円

料理
ミネラル or コーラ
テーブルチャージ
チャーム

三宮生田神社前
パブ&ディスコ
ニュー **ジャンボリビ**
TEL 332-0775

幹事長になってしまって

L 32 藤井和之

今年の夏、鉢伏だったか、神鍋かで合宿があったのですが、そのとき、偶然私が幹事長にきまってしまいました。もっとしっかりした人間は、たくさんいたのです。もしかすると、しっかりしていなかったたので、私になったのかもしれない。かなり長い間ブツブツと文句を言ったのですが、陰謀を企らむ悪しき者たちの結託はかたく、ついに根負けし、引き受けてしまいました。

引き受けてからも、自分の能力を考えると、こういう役は無理だなあと思っていたのですが、幹事学年の引き継ぎを間際にして、逆に考えれば、勉強になるだろうと、開き直りました。(そうだ、人がなんといおうと私はまだ若いんだ、やればできるんだ。)

今は、このクラブに入っていてよかったと思っています。いろんな人に知り合えてよかったと思っています。この一年間、幹事学年を、幹事長をただ一生懸命やりたいと思っています。

昭和五十七年度行事予定

3月6日～12日	春合宿
3月14日(日)	慰労ハイキング
3月20日(土)	歓送誦会
4月～5月	新入生勧誘月間
5月上旬	旧三商大合同発表会
中旬	新入生歓迎ハイキング
中旬	ジュニア合宿
6月上旬	新入生歓迎コンパ
6月20日(日)	学連春季発表会
7月4日(日)	神戸三大学合同発表会
8月上旬	夏合宿
10月17日(日)	学連秋季発表会
11月21日(日)	五十周年記念誦会
12月	クリスマスコンパ

OB 通信

高岡幸彦氏（旧十四回生）

昭和十七年宇治先生に師事して以来謡を続けて参り、漸くこの春素謡「道成寺」を披かせて貰いました。手ほどきを受けました宇治先生の御恩を身にしみて感じるこの頃です。

杉本孝昭氏（新三回生）

風韻会の部員の皆さん、元気で練習に、そして勉学（？）にもご精進のことと思います。いつも六甲パーラーでのコンパに出席することを楽しみにしています。

加藤久佳氏（新二十四回生）

、「風韻」（二十一号）を拝見させていただきましたが、私が卒業してから、ずい分時が経ったものだと感じています。

山岸国夫氏（新二十六回生）

神戸がだいぶ遠くなったように思います。いつも門戸を開放しておいて下さい。そのうちに立ち寄りたいと思います。東京にて

戸田真弘氏（新二十八回生）

みんな元気でやっとなるか。俺は相変わらず元気で仕事している。入社以来、一度も遅刻がないのが自慢や。新歓コンパや夏合宿に行けなくてごめん。許して下さい。

岡田裕子さん（新二十八回生）

夏合宿のご案内していただいたのですが、夏休みに入ってもまだ一日も学校は休んでおらず、このままお盆ごろまで続きそうです。残念ですが、今回も気持ちだけの参加です。がんばってください。

日下恵津子さん（新二十八回生）

新しいエネルギーは不可能を可能にするエネルギーです。新入生のみなさん、がんばってね。

たくさんのお便り、ありがとうございました。

この欄は、日常の発表会、合宿等のお知らせの御返事の中から掲載させて頂いております。これからも、近況、御意見等ございましたらどしどしお寄せ下さい。学生一同、お待ちしております。

思えば・・・

卒業生より

思えば短い四年間でした。自己を見失い、流れるままに流されてここまで辿り着いたのです。途中で逢った友達に感謝しています。

藤裏 聡

思えばクラブをかき回してばかりの四年間でした。僕につきまわされた人達、御免なさい。でも、おかげで忘れかけた何かを取戻せたような気がします。少しは風のように生きることができたのが嬉しいのです。これからも風になって鮮やかに輝いて生きてゆきたい。

I wanna be the wind / 門之園辰志

思えば四年間よく続いたものだ。いや、おいてくれたというべきか。いろいろなことがあったけれど、すべて思い出は美しく、なつかしく。これからもクラブ活動を通して学んだことを大切にしていきたいと思う。

小谷 直子

思えばなんと天候に悩まされた四年間だったろう。猛暑に襲われた一年の夏合宿、冷夏と長雨で気がめいった三年の夏合宿、我々が主催した合宿のリクレーションでは必ず雨が降り、スキーに行けば大雪に閉込められ、温暖なはずの小豆島で寒波で水道管が破裂し雪が積った三年の春合宿。でも、今はすべて楽しい思い出。

能勢 恒男

コンパの御用意は当店で

酒類・食料品商

みどりや

神戸市灘区六甲台町6番21

(六甲団地の下)

電話 (861) 0535番

古書買受・事務用品

(御報 参上)

小牧文具書店

神戸市東灘区御影本町2丁目15-25

電話 851-3286 阪神御影駅南東50m

思えば四年間、ゆっくり過ぎたという人などいないのではないのでしょうか。クラブ一所懸命時代、登クラブ拒否症時代を経、卒業となつてしまいました。「イタリア」、「メンデルスゾーン」を聴きながら春を迎える今日この頃です。

山下美登利

第三回神大風韻会OB会報告

とき 昭和五十六年八月二十三日(日)

ところ 三宮交通センタービル六階「スカイサントリー」

会費 六千円

参加者 荒川裕吉、米花稔両先生

江谷剛、里井三千雄、林哲男、西野公三、堤文男、福田好男、松岡誠夫、段野治雄、尾島洋三、伏見正章、長永恭子、伏見和政各先輩

今回は、堤、林両先輩のお世話のもとで、米花、荒川両先生と二名のOBの方の御参加を得て、にぎやかに行われた。諸先輩の近況報告や、なつかしい思い出話に花がさき、たいへん楽しい会であった。

会計報告

収 入	
会費	84,000
繰越分	207,226
計	291,226

支 出	
会場費	113,850
通信費	21,900
写真代	2,715
雑費	385
保留分	152,376
計	291,226

板 言 伝

○昭和五十六年度

九月 城戸隆一(二十二回生)さん御結婚!

○昭和五十七年卒業生就職決定!

門之園辰志 積水化学工業

能勢 恒男 ジャスコ

藤裏 聡 大林組

小谷 直子 国際電信電話株式会社

山下美登利 教員

編集後記

◇「風韻」二十二号をお届け致します。発行に際しまして、お忙しい中、原稿をお寄せ下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

◇神戸大学風韻会も、発足以来五十年を経過し、その歴史の重さには驚かされます。五十年の間には、いろいろな意味で風韻会も、変わってきたと思います。しかし、根本に流れるものは不変だと思えます。この歴史の流れが絶えることなく脈脈と流れ続ける大河になることを望みます。

◇いよいよ本当のお別れです。ありがとうございます。私たちが頑張りますから、皆さんも頑張ってください。また会える日を楽しみにしています。

編集委員 門之園辰志

小谷 直子

能勢 恒男

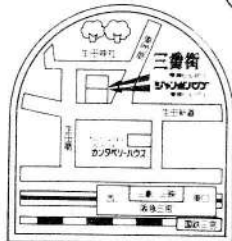
藤裏 聡

山下美登利

<p>昭和57年 5月31日 印刷 昭和57年 6月 1日 発行</p> <p>発行所 神戸大学風韻会 神戸市灘区六甲台町</p> <p>印刷所 みなと出版印刷株式会社 神戸市中央区脇浜町1丁目2番2号 電話 251-6217(代)</p>	<p>雑誌からコピー印刷まで……</p> <p>みなと出版印刷(株)</p> <p>神戸市中央区脇浜町 1丁目 2番2号 電話 251-6217(代)</p>
--	--

コンパ・パーティーはお気軽に

お得なパーティーパック 15名様以上 1,950円



三番街
カンタベリーハウス

MENU	
バイキング (部一人様)	¥ 850
G&G (ボトル)	¥ 3,200
スーパーニック (ボトル)	¥ 4,500
V&SOP (ボトル)	¥ 4,500
サフツル (一合)	¥ 400
ビール	¥ 400
高橋フィズ	¥ 350
ミネラルほか	¥ 250

予約はOK!

3 フランキブ **カンタベリー三番街**

〒651 神戸市中央区下山手通1丁目5番1号(東映ビル4F)
〒653 神戸市中央区北長狭通1丁目5番1号(大山ビル5F)

プレイ・バブ **カンタベリーハウス**

〒653 神戸市中央区北長狭通1丁目5番1号(大山ビル5F)
☎331-3766

ステージでカラオケも楽しめます。